

Drama

2026/2027シーズン 演劇 ラインアップ[°]

〈計7演目〉

2026年11月

巨匠とマルガリータ

原作:ミハイル・ブルガーコフ

翻案:エドワード・ケンプ

翻訳:小田島創志

演出:上村聰史

2026年12月

ミノタウロスのⅢ

新作

原作:藤子・F・不二雄

脚色・振付・演出:スズキ拓朗

2027年3月

ナハトラント ～ずっと夜の国～

日本初演

作:マリウス・フォン・マイエンブルク

翻訳:長田紫乃

演出:柳沼昭徳

2027年4月

見えざる手

日本初演

作:アヤド・アクタル

翻訳:浦辺千鶴

演出:上村聰史

2027年5月

Ruined 奪われて

日本初演

作:リン・ノッテージ

翻訳:小田島則子

演出:五戸真理枝

2027年6月

抱擁

新作

作・演出:山田佳奈

2027年7月

エンジェルス・イン・アメリカ

グリーン・リバイバル・ラボ #1

作:トニー・クシュナー

翻訳:小田島創志

演出:上村聰史

プロジェクト

集団創作による新作

劇作コンペ・出演者フルオーディション

グリーン・リバイバル・ラボ

ドラマクエスト—物語の探求—

巨匠とマルガリータ

2026年11月

The Master and Margarita

中劇場

○会員先行販売期間：2026年8/29(土)～9/7(月) ○一般発売日：2026年9/13(日)

原作：ミハイル・ブルガーコフ

Original by Mikhail BULGAKOV

翻案：エドワード・ケンプ

Adapted by Edward KEMP

翻訳：小田島創志

Translated by ODASHIMA Soshi

演出：上村聰史

Directed by KAMIMURA Satoshi

出演：成河 花乃まりあ 松島庄汰 菅原永二

明星真由美 小松利昌 富山えり子 内田健介 山本圭祐 山森大輔

柴一平 采澤靖起 近藤隼 猪俣三四郎 篠原初実 笹原翔太

大鷹明良 篠井英介

Cast : Songha, KANO Maria, MATSUSHIMA Shota, SUGAWARA Eiji,

MYOSEI Mayumi, KOMATSU Toshimasa, TOMIYAMA Eriko, UCHIDA Kensuke, YAMAMOTO Keisuke, YAMAMORI Daisuke,

SHIBA Ippei, UNEZAWA Yasuyuki, KONDO Jun, INOMATA Sanshiro, SHINOHARA Hatsumi, SASAHARA Shota,

OTAKA Akira, SASAI Eisuke

作品

上村聰史芸術監督のシーズンオーブニング作品として、ミハイル・ブルガーコフ原作の『巨匠とマルガリータ』を、上村自身の演出により上演いたします。

『巨匠とマルガリータ』は、1929年～40年にかけてブルガーコフにより執筆された小説です。当時はソ連当局によって体制批判とみなされ、検閲版としてようやく出版にこぎつけたのは作家の死後26年が経った66年、さらに完全版が出版されたのは73年となります。幻想と現実、そして時代を巡り、人間の善悪や愛、芸術の不滅性を奇想天外に描いたこの作品は、その後映画、テレビドラマ、舞台化もされ、今日では20世紀ロシア文学の最高傑作と呼ばれるに至ります。

本企画では英国のナショナル・シアターや王立演劇学校 (RADA) で活躍したエドワード・ケンプにより、主人公である「巨匠」を小説家から劇作家に翻案した戯曲版(2004年初演)にて上演いたします。上村がブルガーコフ作品の演出を手掛けるのは、第32回読売演劇大賞優秀作品賞を受賞した、2024年上演の『白衛軍 The White Guard』に次いで二度目となります。

—原稿は燃えない—

物理的に原稿が燃やされても、その中に込められた思想や魂は決して消滅しない。真に価値ある作品は、権力や抑圧によって破壊されることはなく、いつか必ず人々の手元に届くというブルガーコフ自身の信念と希望が込められた本作の一節です。同時に、芸術が時の流れや政治的状況を超越した普遍的な価値を持つことを示しており、ブルガーコフにとって、文学とは人間存在の根源的な問いを扱うものであり、その真実を追求する力こそが、いかなる抑圧にも屈しない不滅の力を持っているというメッセージが込められています。

芸術の根源とは、創造とは何かを見つめなおし、今を生きる勇気へつながるこの力強い一節を有する本作を、上村芸術監督のシーズンオーブニングを飾る祝祭劇としてお届けいたします。

物語

舞台は1930年代のモスクワ。文学界は官僚主義と検閲にぎんじがらめ。そんな中、劇作家である、通称「巨匠」は、キリストの処刑を決めたローマ総督・ピラトを題材にした野心的な作品を書き上げる。しかし、その作品は体制に受け入れられず、激しい批判にさらされ、絶望の淵に突き落とされた結果、彼は自分の原稿を焼き払い、精神病院へと姿を消してしまう。一方、巨匠には愛する女性、マルガリータがいた。彼女は美しく聰明で、巨匠の才能を誰よりも信じていた。巨匠がいなくなり、絶望的な日々を送るマルガリータの前に、突如として奇妙な外国人ヴォランドとその取り巻きたちが現れる。ヴォランドはモスクワの街で様々な騒動を引き起こしながら、市民たちの本性を試そうとしていた。マルガリータは、唯一の願い“愛する巨匠と再び会うこと”を叶えてもらうためにヴォランドの取引に応じる。ヴォランドの目的、巨匠の運命、そしてマルガリータの愛の行方は一体どうなるのか？モスクワの日常と幻想的な世界が交錯する中で、人間の善と悪、愛と信仰、そして芸術の真価を深く問いかける壮大な物語。

翻訳家からのメッセージ

小田島創志

とてつもない演劇になりそうだ。

『巨匠とマルガリータ』は、作者ミハイル・ブルガーコフがこの世を去る1940年まで書き続けた長編小説で、生前の彼が執筆した小説・戯曲はことごとく発禁処分・上演禁止処分を受けていた。しかし死後26年経った66年に、検閲を受けた不完全な版が初めて活字化され、その後73年に単行本として刊行されている。作中に悪魔のヴォランドが「原稿は燃えない」と語るが、『巨匠とマルガリータ』の原稿もまた“燃えずに”蘇ったのだ。

エドワード・ケンプの翻案による舞台版は2004年にチチェスターで初演された。原作の“巨匠”はヨシュアとピラトを主題とした小説を執筆するが、ケンプ版の“巨匠”は演劇の台本として執筆している。ケンプ版では、演劇ならではの仕掛けが存分に散りばめられており、“巨匠”とマルガリータ、ヴォランドたちの目を通して、権力によって真実が歪曲される様相、その権力の内側で抑圧されるものの苦悩、そして抑圧へ抵抗することの重要性が浮かび上がる。前述の「原稿は燃えない」という言葉は、「文学、芸術は永遠に生き続ける」という、表現の自由を謳う宣言として響き渡る。その響きを翻訳者として大切にしたい。

演出家からのメッセージ

上村聰史

「芸術は燃えない」

「原稿は燃えない」。『巨匠とマルガリータ』のなかで有名なこの言葉は、権力による弾圧に対して、真実は決して滅びず、いつか必ず甦るという、作者ブルガーコフ自身の願いが込められた珠玉の名フレーズとして、世紀をまたいで広く知られています。原作小説での“巨匠”は小説家ということもあり、ここでいう原稿は、「文学は燃えない」「己が作り出した小説は燃えない」と解釈することができます。ですが、今回は“巨匠”が小説家という設定から劇作家という設定にアレンジされたエドワード・ケンプの翻案で上演します。ですので「原稿は燃えない」は、本作では「演劇は燃えない」と捉えることができます。そう考えると、「原稿」は様々な芸術に置き換えることが可能で「音楽」「絵画」「映画」「舞踊」と広がっていき、まさしく「芸術は燃えない」といった意味を持っていきます。では芸術とはいったい何なのか。「芸術は燃えない」となると、時代を経ても、人類にとっても、いったい何が燃えることはないのか。

本作を新シーズンの開幕作品として上演することは、演劇賛歌の意味合いもありますが、世界の多数派が時として生み出す苦痛、暴力、抑圧に対して、どのようにして現代人は立ち向かえばいいのか、そして人は何を大切にして社会の軋みに立ち向かえばいいのか。1930年代の閉塞的なモスクワ、絶大な権力で統制が強いられる古代エルサレム、何かやらかしそうな悪魔たちと、荒唐無稽で虚実入り混じるシチュエーションを中劇場の空間性を最大限に活かしながら演出します。そして芸術の根源が何なのかを、より切実さを持って描き、その根源こそが、今を生きる勇気につながるよう、そのような作品を仕立てたいと思います。

スタッフ プロフィール

ミハイル・ブルガーコフ

Mikhail BULGAKOV

1891年～1940年。ウクライナの首都、キーウ出身の小説家、劇作家。幼少期から内外の文学に親しみ、その体験は彼の後半生に多大な影響を及ぼした。キーウ大学で医学を修め、医師として開業。18年、ロシア革命に伴う内戦では軍医として参加。戦後、文学で身をたてる決意をし、モスクワへ移住。ロシアの文学雑誌に載せた短編小説が高く評価され、作家として注目される。しかし、彼の作品には、根底に革命政府への批判が込められていたため、たびたび出版・上演禁止に晒される。弾圧の中でも精力的な創作活動を行ったが、病魔のため、48歳の若さで世を去った。それらの作品群はスターリン死後、54年のソヴィエト作家同盟第二回大会で正式に名誉回復され、現在では彼の作品の出版、上演は世界的に行われている。

エドワード・ケンプ

Edward KEMP

イギリス出身の劇作家、演出家、ドラマトゥルク、翻訳家。若くして劇作家として頭角を現し、15歳で書いた戯曲『The Iron And The Oak』はテキサコ／ナショナル・ユース・シアター劇作コンクールで最も有望な劇作家賞を受賞。その後、チチェスター・フェスティバル・シアターや、ナショナル・シアターで常任演出家を務めるなど、イギリス演劇界の中心で活躍。2008年から21年までは、王立演劇学校(RADA)のディレクターを務め、発展に尽力。現在は、イギリスで最も古い文学慈善団体であるロイヤル・リテラリー・ファンドの最高責任者(Chief Executive)として活動中。

小田島創志

ODASHIMA Soshi

1991年生まれ。武蔵大学、共立女子大学ほか非常勤講師。演劇雑誌「悲劇喜劇」編集協力。専門はハロルド・ピンター、トム・ストッパードを中心とした現代イギリス演劇。これまでの翻訳作品に『ロミオとジュリエット』『リチャード三世』『嵐 THE TEMPEST』『ドクターズジレンマ』『BIRTHDAY』『ULSTER AMERICAN』『ブレイキング・ザ・コード』『ラビット・ホール』『聖なる炎』『管理人／THE CARETAKER』『HEISENBERG (ハイゼンベルク)』『ポルノグラフィ』『受取人不明 ADDRESS UNKNOWN』など。一川華との共訳作品に『ケイン&アベル』。ミュージカルの翻訳・訳詞作品に『A Year with Frog and Toad～がまくんとかえるくん』『スライス・オブ・サタデーナイト』『回転木馬』。新国立劇場では、『スリー・キングダムス Three Kingdoms』『白衛軍 The White Guard』『エンジェルス・イン・アメリカ』『アンチポデス』『タージマハルの衛兵』を翻訳。



巨匠とマルガリータ

スタッフ プロフィール

上村聰史
KAMIMURA Satoshi

※3ページを参照



ミノタウロスの皿

2026年12月
〈新作〉New Play

The Minotaur's Plate

小劇場

○会員先行販売期間：2026年9/26(土)～10/5(月) ○一般発売日：2026年10/17(土)

原作：藤子・F・不二雄

Original by FUJIKO F Fujio

脚色・振付・演出：スズキ拓朗

Choreography, Scripted& Directed by SUZUKI Takuro

作品

音楽やダンス、映像、文学、漫画など、様々なジャンルとクロスオーバーしていくことを掲げた作品として、国民的人気漫画『ドラえもん』の生みの親である、藤子・F・不二雄が1969年に発表した短編SF漫画『ミノタウロスの皿』を世界初舞台化します。

「食べる側」と「食べられる側」の立場が逆転した世界。言葉は通じても価値観が全く通じないことや、自らの常識から抜け出せない人間のジレンマを鋭く描いた本作。その強烈な風刺と衝撃的な結末は、半世紀を経た今もなお、読者の心に深く残り、考えさせられます。この不朽の名作を、令和6年度(第75回)芸術選奨舞踊部門・文部科学大臣新人賞を受賞した気鋭のアーティスト、スズキ拓朗が脚色・振付・演出を手掛けます。スズキ独自の表現で、原作の普遍的な問いを現代に蘇らせ、4歳以上の未就学児から大人まであらゆる世代が楽しめる舞台を目指します。

物語

宇宙空間で制御不能に陥った宇宙船。乗組員一名を残しイノックス星に不時着する。

そこには酸素も原始的な文明も存在した。幸い人類もいて、乗組員は手厚い歓迎と看護を受ける。その看護してくれた人類の中に、ミノアという名の少女がいた。乗組員はいつしかミノアに好意を抱き、仲良くなるのだが、実はイノックス星は、地球で云うところの、牛(イノックス星ではズン類と呼ばれている)が支配階級で、人類(イノックス星ではウスと呼ばれている)はその家畜だったのだ。

あらためて支配階級のズン類の歓迎を受ける乗組員。だが、驚くべき事実を告げられる。それは、ミノアは年に一度のミノタウロスの大祭で大皿に乗せられて、ズン類の食用に供される家畜だったという事実。しかも、それはイノックス星では最高の名誉で、そのためにウスは存在しているのだ、と。

やがて、大祭の日がやってくる。乗組員は、ある決意をもって会場に向かう……。

演出家からのメッセージ

スズキ拓朗

私のところにもうひとり私が現れた。

鈴木 おい知ってるか？『ミノタウロスの皿』の舞台化！？

拓朗 いきなりなんだよ。知ってるに決まってるだろ。俺なんか学生の頃上演しようとしたぐらいだ。まあその時は著作権ってものがあるのを知らなくて上演は叶わなかったけどね。

鈴木 俺だってやろうとしたさ！その時は作品が“少し怖い”って事で劇団内で反対されて上演できず。

拓朗 “少し怖い”じゃなくて“少し不思議”。藤子・F・不二雄のSF短編のSとF。

鈴木 それな！やっと夢が叶う！正に三度目の正直！

拓朗 何事も諦めずに、ねばり強くやっていくことが必要ですなあ。

鈴木 おい、それ藤子・F・不二雄先生の名言だろ。

拓朗 バレたか。

鈴木 「子供のころ、ぼくは“のび太”でした。」藤子先生のこの言葉が好き。僕らは僕ら自身を作品の主人公にしている。少年の頃体験したことを作品に描いている。

拓朗 『ミノタウロスの皿』の主人公はどっちかって言うと21エモンのその後の話って感じなんだよな。

鈴木 主人公がすぐにヒロインのミノアちゃんを好きになっちゃうところはのび太っぽいよね。と、いうかお前っぽい。

拓朗 否定はしない。少年は皆恋多き青春！この作品はブラックユーモアに留まらず、純粹な恋物語も根底にあるのが共感しやすくて好き。

鈴木 藤子先生は難しい問題提起をキュッとユーモアにしてくれるよね。ヒロインのミノアの名前や、イノックス星という設定も、ミノア文明のクノッソス宮殿がモデルになってる。

拓朗 宮殿の迷宮ラビリンスに幽閉されたミノタウロス！タイトルの由来は実在する古代都市にまつわるギリシャ悲劇だったのだ！

鈴木 「ラビリンス」の語源は、ギリシャ語の「ラビュリントス」で、クレタ島にある「ミノタウロスの迷宮」を指した言葉だしね。

拓朗 えっ？それは知らなかった。勉強になる。

鈴木 むふふ。遊びを通して学ぶこと。これも藤子先生のお言葉よ。

拓朗 今回の舞台はまさに「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに」が詰まった演出になりそうだな！

鈴木 その名言は井上ひさし先生だけね。

拓朗 あれ？そーだっけ？失敬。

※藤子・F・不二雄〔異色短編集1〕最終ページ 藤子短編についての架空会話 北村 想 参照

スタッフ プロフィール

藤子・F・不二雄

FUJIKO F Fujio

1951年、『天使の玉ちゃん』で漫が家デビュー。54年、小学校の同級生だった安孫子素雄とともに上京し、“藤子不二雄”として本格的に活動する。87年にコンビを解消し、“藤子・F・不二雄”として『大長編ドラえもん』を中心に執筆活動を続け、児童漫画の新時代を築く。主な代表作は『オバケのQ太郎（共著）』『ドラえもん』『パーマン』『キテレツ大百科』『SF短編』シリーズなど。代表作『ドラえもん』は、19の地域と16の言語で翻訳され、今もなお、世界中の子どもたちに、読み続けられている。2011年9月「川崎市 藤子・F・不二雄ミュージアム」開館。執筆した原画を展示する、藤子・F・不二雄を顕彰する美術館。

スズキ拓朗

SUZUKI Takuro

振付家、演出家、ダンサー。ダンスカンパニー CHAiroiPLIN主宰。コンドルズ所属。蜷川幸雄が学長を務める桐朋学園芸術短期大学に入学し、演劇・パントマイム・ダンスの基礎を学ぶ。令和6年度芸術選奨舞踊部門文部科学大臣新人賞、令和元年度文化庁芸術祭舞踊部門新人賞、第46回舞踊批評家協会新人賞、第9回JaDaFo賞、横浜DANCE COLLECTION EX2011奨励賞、若手演出家コンクール2013最優秀賞など受賞。NHK『みいつけた!』振付出演。『刀剣乱舞』『文豪ストレイドックス』、日生劇場、博多座公演への振付など多数。フィリップ・ドゥクフレ作品などにも客演。桐朋学園芸術短期大学、国際文化学園非常勤講師。平成27年度東アジア文化交流使。



ナハトラント～ずっと夜の国～

2027年3月
〈日本初演〉Japan Premiere

Nachtland

小劇場

○会員先行販売期間：2027年1/10(日)～1/19(火) ○一般発売日：2027年1/23(土)

作：マリウス・フォン・マイエンブルク

翻訳：長田紫乃

演出：柳沼昭徳

Written by Marius von MAYENBURG

Translated by NAGATA Shino

Directed by YAGINUMA Akinori

作 品

時代の変化のなかで、舞台芸術がより、現代的、国際的、批評的であることを目指した作品づくり。その第一弾としてドイツの現代演劇界を代表するマリウス・フォン・マイエンブルク作『ナハトラント～ずっと夜の国～』を上演します。2022年12月にベルリン・シャウビューネ劇場にてマイエンブルク自身の演出で初演された本作は、『火の顔』で日本でもよく知られる作者が、ナチス・ドイツというデリケートで重いテーマを、現代の感覚に埋没した家族の日常に落とし込んだ力作。ブラックなユーモアと利己的な滑稽さが織り交ぜられる中で、過去の歴史とどう向き合うべきかが問われ、現代社会の欺瞞や問題が浮き彫りになります。

翻訳は、ドイツ在住で、ミステリー小説『汚れなき子』など数多くのドイツ作品の翻訳を手掛けている長田紫乃が担当し、演出は、約4年間にわたる「こつこつプロジェクト」を経て、25年に上演された『夜の道づれ』で、作品を深く掘り起こし戯曲に丁寧に向き合った柳沼昭徳が手掛け、日本初演でお送りいたします。

物 語

闘病の末に父親が亡くなつて2週間後、ニコラとフィリップは遺品整理のため実家へ集まる。特に価値のあるものは見つからない中、ニコラの夫・ファービアンが、屋根裏で小さな水彩画を見つけ、フィリップの妻・ユーディットが、その絵の署名が「A. Hitler」(アドルフ・ヒトラー)ではないかと言い出す。ニコラとフィリップは、それまで気にも留めていなかった絵に急に執着しだし、鑑定士・エファマリアを呼ぶ。ナチスとの関わりが証明できれば高額で売れるだろうと聞いた二人は必死に証拠を探しだすが、ユダヤ系のユーディットはそれに激しく反発、絵の真贋をめぐって関係はどんどん険悪になっていく。そんな中、購入を希望する画商・カールまで現れ……。

翻訳家からのメッセージ

長田紫乃

自国の歴史にどう向き合うか。「ヒトラーとユダヤ人迫害」言うまでもなく、これはドイツ人にとって避けて通れないテーマです。多くの戯曲がこの大きなテーマを扱い、人々に多面的な思考を促してきました。ナハトラントの語源となった「アーベントラント」にはドイツ人がヨーロッパに回帰する（一体的ヨーロッパの一部となる）といったイメージがあります。ドイツ人は様々な自問自答を繰り返しながら、戦後80年、善きヨーロッパ人としてのアイデンティティを模索してきました。しかし近年の国際情勢の動きと格差、移民、様々な要因から、再びドイツは大きな分断に晒されています。そして亡靈は再び現れる、いや、亡靈は常にそこにある一度も消えてはいなかつたのかかもしれません。

国際情勢と揺れるアイデンティティ、そこに芸術の価値は一体どこにあるのか、という問いを組み合わせ、滑稽な会話劇に昇華する作家の手腕を存分にご堪能いただきたいと思います。

翻訳にあたっては、ドイツ語の皮肉、嫌味、当て擦りの裏に隠された真意を、日本語に分かりやすく噛み砕くことを心がけました。台詞の音を演出家と役者陣と共に現場で更に煮詰めていく作業をとても楽しみにしています。

演出家からのメッセージ

柳沼昭徳

世界中のほとんどの国が巻き込まれたあの戦争を、主語を「私」として語ることができる人々が次々といなくななり、まもなく、伝聞や憶測でしか語れない時代に突入します。そんなある時、まったく関係なんかないと思っていた今の私が、突然その語り部の主体として、あの戦争の記憶に放り込まれたら？ この作品は、父の死をきっかけに家族が遺品を整理する——そんな日常の場面から、戦後ドイツが抱え続ける「過去の責任」が立ち上がりしていく作品です。忘却ではなく、直視することによってしか再生できないという、ドイツ的な“記憶の倫理”がここにあります。日本の芸術は、これまでしばしば「失われたものを悼む」ことで過去と向き合ってきました。能や近代文学が示してきたように、亡靈は慰めや鎮魂の象徴として現れる。しかし『Nachtland』の亡靈たちは、慰めるためではなく、問うために現れます。彼らは沈黙の中から、「あなたは本当に関係がないのか？」と囁くのです。今回の上演では、この異なる「記憶のかたち」の交差点に焦点を当てます。日本の観客が、他者の歴史を通して自らの沈黙を聞き取る——そのような思考の場として、この作品を立ち上げていこうと考えています。

ナハトラント～ずっと夜の国～

スタッフ プロフィール

マリウス・フォン・マイエンブルク

Marius von MAYENBURG

1972年、ミュンヘン生まれ。劇作家・演出家。ベルリン芸術大学で劇作を学び、在学中の97年に執筆した戯曲『火の顔』で注目を集める。99年からはベルリン・シャウビューネ劇場でドラマトゥルク・座付き作家を務める。その後も、『バラサイトたち』『冷たい子ども』『エルドラド』『石』などの戯曲を執筆し、『醜男』をはじめとする作品は30か国以上の言語に翻訳され、世界各地で上演されている。また、サラ・ケインの『渴望』などの現代戯曲に加え、シェイクスピアやオスカー・ワイルドといった古典作品のドイツ語翻訳と演出も手掛ける。2009年以降は、ベルリン・シャウビューネ劇場を中心に自身の戯曲や多くの作品を定期的に演出し、その作品はミュンヘン・レジデンツ劇場やオスロのナショナル・シアターなどでも上演されている。

長田紫乃

NAGATA Shino

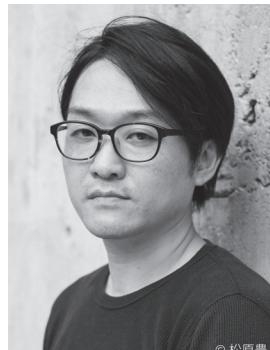
1986年神奈川県生まれ。幼少期をオーストリア／ドイツで過ごす。東京大学文学部ドイツ語ドイツ文学専修課程卒業、同時に文学座附属演劇研究所で演劇を学んだ。2016年文化庁新進芸術家海外研修制度研究員として渡独。21年ドイツのミステリ小説『汚れなき子』を翻訳出版（小学館文庫）。これまでの翻訳上演作品に『金色の龍』『カスパー・ホイザーメア』『山歩き』『グッバイ、レーニン！』など。24年文学座アトリエの会『アンドーラ 十二場からなる戯曲』は第17回小田島雄志・翻訳戯曲賞 作品賞を受賞。デュッセルドルフ在住。



柳沼昭徳

YAGINUMA Akinori

1999年に「烏丸ストロークロック」を旗揚げ。京都を拠点に三重・広島・豊岡など国内各地でアーティスト・イン・レジデンス活動を行う。作品のモチーフとなる地域での取材やフィールドワークを元に短編作品を連作し、数年をかけて長編作品へと集成する創作スタイルが評価されている。2015年『新・内山』にて第60回岸田國士戯曲賞にノミネートされる。17年京都市芸術新人賞受賞。18年、20年と東京芸術劇場 芸劇eyesにて『まほろばの景』シリーズを上演。昨今では新国立劇場「こつこつプロジェクト」第二期・第三期に参加。この「こつこつプロジェクト」から生まれた『夜の道づれ』は「Studio 公演」として25年4月に上演された。21年より兵庫県豊岡市の山間農村地帯において住民とともに地域芸能「但東さいさい」を創作し、毎年の上演を行っている。



見えざる手

2027年4月
〈日本初演〉Japan Premiere

The Invisible Hand

小劇場

○会員先行販売期間：2027年2/6(土)～2/15(月) ○一般発売日：2027年2/23(火・祝)

作：アヤド・アクタル

Written by Ayad AKHTAR

翻訳：浦辺千鶴

Translated by URABE Chizuru

演出：上村聰史

Directed by KAMIMURA Satoshi

作品

現代的、国際的、批評的な作品づくりの第二弾として、『ディスグレイスト』でピュリッタ賞を受賞したアメリカの劇作家アヤド・アクタルによる資本主義と信仰、暴力と倫理が交錯する密室劇をお送りします。

本作は、2012年に一幕劇として上演され、14年には二幕構成に拡大されてオフ・ブロードウェイで初演。以降、15年オビー賞（劇作部門）、ジョン・ガスナー劇作家賞を受賞、16年イブニング・スタンダード賞および、17年ローレンス・オリヴィエ賞にノミネートされるなど、英米で多くの賞賛を浴びてきました。

物語は、パキスタンでテロ組織に誘拐されたアメリカ人銀行家ニック・ブライトが、自らの身代金を稼ぐために市場取引を持ちかけるという意外な提案から始まります。彼の金融知識はやがて組織に巨額の富をもたらしますが、その過程で理念や信仰が揺らぎ、金に支配され欲望がむき出しになる人間の姿が、張りつめた緊張感のなかで展開されます。

タイトルの「見えざる手」とは、“各個人が自己の利益を追求することで、意図せず社会全体の利益や調和がもたらされる”という、経済学の父、アダム・スミスが唱えた概念です。本作ではその“見えざる力”が、皮肉にも信仰や倫理までも飲み込む冷徹な存在として描かれます。

資本主義の暴力性と人間の欲望を鋭く描く、現代の寓話といえる本作の演出は、緻密な戯曲の読み解きと、俳優との丁寧な対話、巧みな空間演出に定評がある新芸術監督・上村聰史が自ら手掛けます。

物語

パキスタンのとある監禁部屋。

アメリカ人銀行員のニック・ブライトは、上司と間違われイスラム系テロ組織に誘拐される。要求された身代金は1,000万ドル。政府も銀行も動かない孤立無援の中で、彼は組織にある“取引”を持ちかける——それは、自らの金融知識を使って市場で資金を稼ぎ出すことだった。

ニックと対峙するのは、理想に燃える若き組織員バシール、その手下で監視役のダール、そして組織を率いるイマーム・サリーム。ニックと彼らの間に築かれた金融取引のシステムは、やがて組織に富をもたらすと同時に、個人の信念と人間関係の均衡を崩し、蝕んでいくのだった。

資本の力が信仰を揺るがし、理念が数字に飲み込まれるとき——誰が操る者で、誰が操られる者となるのか？

命と信仰を賭けたマネーボードの果てに現れる「見えざる手」とは何か、そしてニックは「自由」を取り戻すことができるのか？

翻訳家からのメッセージ

浦辺千鶴

人は分かり合えるのか、それとも国、宗教、環境を前に価値観の壁を越えられないのか。人間として普遍的な正義はあるのか、あるいは状況によって姿を変えるものなのか。この作品を読んで、より一層答えに悩むようになった。

テロ組織に誘拐された男が、生き延びるためテロリストに投資教育を提案する。極限の状況下で、知識を教え、成功体験を共有することで心理的距離に変化が生まれる。互いの正義や価値観に対する認識に変化が生じ、異なる角度の世界が見え始める。

「The Invisible Hand」とはアダム・スミスの『国富論』にある「個人が自らの利益を追求することで、結果的に社会全体の利益が達成される」という経済思想だが、本作では自分を救うための行動がテロ組織に利益をもたらすというまさに「見えざる手」の状況となる。そのことにより新たなテロが起こり、社会や人々の運命が変わる。彼自身が世界を動かす「見えざる手」になることを示唆する皮肉なタイトルでもある。

2014年の初演から約10年。その間に世界はコロナ禍で物理的な分断を経験し、政治・経済・価値観など様々な分断が顕著になり、分断の時代とも言われる。違いが優位な社会で、説得ではなく理解が目的の対話はあり得るのか。人間の内なる善に光を当てる演劇に携わる者として、世界に共通の願いが存在し続けることを願わずにいられない、そんな気持ちにさせられる作品である。

演出家からのメッセージ

上村聰史

「賭博国家、その代償」

イスラム教徒のテロ組織によって、アメリカ人銀行家が誘拐される。そして始まる“金融取引”と“新興国の現状”との不協和音。サスペンスフルに展開する物語に加え、「経済学の父」と称されたイギリスの哲学者、アダム・スミスの『国富論』の一節から引用された『見えざる手』というタイトルは、利益重視の経済活動と世界の分断との相互関係を象徴するかのよう。個人の利益追求を目的としたマーケット参入は、その意志とは裏腹に、マーケットの「見えざる手」によって社会全体の調和を促していく、あるいは真逆の方向に向かう。いずれにしても、個人の行動にはその範疇を超えた全体の力が作用するという、スミスの「見えざる手」の理論ですが、生活水準を高める経済活動こそが、強者が弱者を排除しようとする見えない思惑へと、私たちを導いているのだとしたら……。

「未来については国が責任をもって保障できないので国民一人ひとりにお任せします」といった理由で、個人のマーケット参入を煽る日本。過激な言い方をすれば、賭博国家の道を歩もうとしている私たち。

パキスタンのとある場所に監禁された資本主義のアメリカ人、自由という名の理想を掲げるイスラム教徒、そしてマーケットにつながったパソコンが織り成していく『見えざる手』という物語によって、今私たちが突き進もうとする経済活動の代償を、強烈に浮かび上がらせていきたいと思います。

スタッフ プロフィール

アヤド・アクタル

Ayad AKHTAR

アメリカの劇作家・小説家・脚本家・俳優。宗教、移民、経済、アイデンティティといった現代社会の複雑なテーマを鋭く描く作風で国際的に注目されている。戯曲『ディスグレイスト』は2012年にニューヨークで初演され、オビー賞(戯曲部門)を受賞。翌13年にピュリッツアー賞(演劇部門)を受賞し、14年にはブロードウェイでも上演。15年にはトニー賞 最優秀作品賞にもノミネートされた。その他の戯曲に、『The Who & The What』『Junk』などがある。小説『American Dervish』では、イスラム教徒の少年を主人公に、信仰と家族のあいだで揺れる心を繊細に描き、多くの読者の共感を呼んだ。また、映画『The War Within』では脚本と主演を務め、インディペンデント・スピリット賞 脚本賞にノミネートされた経験も持つ。現在はニューヨークを拠点に活動している。

浦辺千鶴

URABE Chizuru

上智短期大学英語学科、東京女子大学文理学部英文学科卒業。小田島恒志氏、山内あゆ子氏に師事。2009年、新国立劇場『シート・ザ・クロウ』(小田島恒志共訳)で翻訳家としてデビュー。新国立劇場では他に、『ロビー・ヒーロー』『スカイライト』『君が人生の時』『パッション』『星ノ数ホド』を翻訳。その他の主な翻訳作品に『リンス・リピート—そして、再び繰り返す—』『GOOD—善き人—』『ロスマールスホルム』『Home, I'm Darling～愛しのマイホーム～』『ホイッスル・ダウン・ザ・ウインド～汚れなき瞳～』『死と乙女』『スケリグ』『マクガワン・トリロジー』『FUN HOME ファン・ホーム ある家族の悲喜劇』『CRIMES OF THE HEART—心の罪—』など。『星ノ数ホド』『月の獣』の翻訳に対し、第8回小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞。



上村聰史

KAMIMURA Satoshi

※3ページを参照



Ruined 奪われて

2027年5月
〈日本初演〉Japan Premiere

Ruined

小劇場

○会員先行販売期間：2027年3/7(日)～3/16(火) ○一般発売日：2027年3/20(土)

作：リン・ノッテージ

Written by Lynn NOTTAGE

翻訳：小田島則子

Translated by ODASHIMA Noriko

演出：五戸真理枝

Directed by GONOHE Marie

作品

ピュリッツァー賞を2度受賞した唯一の女性劇作家、リン・ノッテージ。彼女が手がけた『Ruined』は、コンゴ内戦下で性暴力を受けた女性たちが、極限状況において、いかにして尊厳を保ち、生き抜いたのかを描いた作品です。善悪の二元論では捉えきれない登場人物たちを通し、それでも生きていく女性たちの姿を鮮やかに描き出した本作はピュリッツァー賞、オビー賞をはじめ数々の賞を受賞。遠い国の出来事を「自分ごと」としてとらえるきっかけを私たちに与えました。そして、現代的、国際的、批評的な作品づくりにふさわしい本戯曲を、満を持して日本初演でお送りします。

演出を手がけるのは、第30回読売演劇大賞最優秀演出家賞を受賞した五戸真理枝。『貴婦人の来訪』などで、その斬新な視点が高く評価された彼女が、繊細かつ緻密でありながら、大胆な発想を取り入れた演出でこの難作に挑みます。なお、一部の役については、公募オーディションを開催し、出演者を決定する予定です。

物語

コンゴ民主共和国の内戦が続く中、ママ・ナディは、政府軍、反政府軍や鉱夫が入り乱れる小さな町でバー兼壳春宿を営んでいる。ある日、行商人のクリスチャンが、性的暴行で心身に深い傷を負った2人の女性、ソフィとサリーマを連れてくる。ママ・ナディは、金儲けのために彼女たちを雇い入れる一方で、必死に安全を守ろうとする。店では、女性たちが客にサービスを提供しながらも、歌やダンス、ささやかなおしゃべりを通して、わずかな日常と尊厳を取り戻そうとしている。しかし、戦火はバーの内にも迫り、兵士たちの襲撃や暴力が繰り返され、彼女たちは再び傷を負う。

翻訳家からのメッセージ

小田島則子

リン・ノッテージの『Ruined』(2008年にアメリカのシカゴで初演)を日本で上演できる日が来るとは！アフリカ大陸のコンゴ民主共和国を舞台にしたこの戯曲を初めて読んだときには、なんと恐ろしく、悲しく、ロマンチックな話なのだろうと震えが出るほど感銘を受けました。しかしそこに描かれている紛争の背景も、紛争時に起きた残酷な性暴力の実体も、そして複数の部族に亘る黒人の登場人物たちの造形も日本で翻訳上演するにはハードルが高すぎると思ったのです。

ところが新国立劇場の「2026/2027シーズン演劇ラインアップ」にその『Ruined』が加えられ、しかも翻訳を私が担当させて頂けると聞いて、今度こそ本当に震えが出ました。リン・ノッテージは『Ruined』で09年にピュリツァー賞を受賞し、さらに17年に『Sweat』(15年にアメリカのオレゴンで初演)で再度ピュリツァー賞に輝きました。女性劇作家でピュリツァー賞を複数回受賞したのは今のところ彼女が唯一です。ノッテージは現在コロンビア大学の教授として若手劇作家を育てながら、自身も新作の執筆や自作の翻案を続けており、まさに現代アメリカ演劇の牽引役です。私が初めてノッテージの作劇の素晴らしさに触れたのは『Sweat』を翻訳したときでした(小田島恒志との共訳、19年に劇団青年座で上演)。アメリカのラストベルトに材を取ったこの戯曲には、空洞化した産業地帯でもがく人々の汗(sweat)が臭ってくるような言葉が綴られています。ノッテージは社会の大きなうねりや混迷を捉えつつ、それを生き抜いていく個々人をドキュメンタリーではなくドラマとして描いていく名手です。

この『Ruined』は読んだだけで人物の息づかいや、コンゴの光と影までが伝わってくるような気持ちになります。そのような戯曲を日本語に翻訳する作業には大いに意欲を搔き立てられますが、同時に不安も大いにあります。しかしこの舞台の演出を五戸真理枝さんが担当されると聞いて、今は不安よりも期待が大きくなりました。五戸さんは近年『貴婦人の來訪』や『兵卒タナカ』などの難物を見事な舞台に仕立てた演出家であるだけでなく、劇作家としての手腕も持っています。演出の五戸さんをはじめとしたスタッフ、キャストの皆さんと『Ruined』に取り組む時間を大切にして、翻訳者としての務めをしっかりと果たしたいと思っています。

演出家からのメッセージ

五戸真理枝

本作では、コンゴ民主共和国東部、イトゥリの森にあるバーを舞台にその土地に生きる人々の姿が描き出されます。そこには、政府軍、反政府軍が対立する紛争があり、携帯電話などの電子機器に使われる鉱物、コルタンの採掘地があり、その利権をめぐる争いもあります。人の命や生活が赤子の手をひねるように奪い取られてしまう土地で、ママ・ナディは、夜な夜なバーの扉を開き、客たちを迎えます。バーには、採掘労働者、敵対する兵士や軍曹、鉱物商たちが集い、迎えるのは生まれ育った村を追い出された女たち。戯曲を初めて読んだときは、ドキュメンタリーのような真に迫るリアリティと共に、今まで感じたこともないような大きな呼吸を感じました。地球の息吹のような、熱帯雨林に立ち込める空気や夜の森に響く歌や音楽、愛を吟ずる詩、時折聞こえてくる失われかけている民族語。

紛争に関する歴史や現実を調べていくと、問題の根深さに絶望的な気分になってしまうのですが、絶望するだなんて言いかたは、失礼だなと思えてきました。ママ・ナディ達はそこに生きているのです。傷つけられ、非難され、隠れるように生きざるを得ない女性たちにとっては、生きることがそれだけで抵抗なのかもしれません。

遠く離れたアフリカの中央部にあるコンゴ民主共和国の物語を描くことが本当にできるのだろうか、という恐れももちろんあります。ですがわたしは演劇とは物語を届ける力のことで、現実世界では簡単に人とシェアできない怒りや悲しみをシェアするためにあるのだと思っています。スタッフ、キャストの皆様と共に、いろんな角度からこの、本当に起きている物語を見つめ、演劇として再構築する方法を模索していきたいと思います。

演劇も、音楽やダンスや美術と同じように、楽々と国境を越えられる芸術。話す言語や暮らす土地が全く違っていても、すべての人間は、身体構造やそこに宿る精神のあり方、つまり、生物としての構造が共通しています。肉体と精神の共感力と想像力をフル稼働して物語を立ち上げていきたいと思っています。

観客の皆さんには、ただ演劇を“見る”のではなく、その空間に身を置き、登場人物の声に耳を傾け、物語と“今”を重ねて感じていただきたいと思っております。

どうぞ、日常を少し離れ、コンゴの森の隣のバーで一夜を共に過ごしてください。劇場でお会いできる日を、心よりお待ちしております。

スタッフ プロフィール

リン・ノッテージ

Lynn NOTTAGE

1964年、ニューヨーク生まれ。劇作家。2009年に『Ruined』で、17年には『Sweat』で、女性として史上初めてピュリツツァー賞戯曲部門を2度受賞している。ブラウン大学とイェール演劇大学院で学び、1990年代にプロの劇作家としてキャリアをスタート。短編戯曲『Poof!』でハイデマン賞を受賞したほか、20世紀初頭のニューヨークを舞台にした『Intimate Apparel』はニューヨーク演劇批評家サークル賞など高い評価を得ている。近年では、ブロードウェイで上演されたマイケル・ジャクソンの楽曲をフィーチャーしたミュージカル『MJ the Musical』の脚本も手掛けるなど、その活動は多岐にわたり、彼女の戯曲は、アメリカ合衆国および世界中で広く上演されている。2019年にはタイム誌の「世界で最も影響力のある100人」に選ばれた。現在もコロンビア大学で教鞭を執りながら、精力的に執筆を続けている。

小田島則子

ODASHIMA Noriko

翻訳家。早稲田大学大学院博士課程、ロンドン大学大学院修士課程修了。訳書に『クマのプーさん 世界一有名なteddy・bearのおはなし』などがあり、主な戯曲翻訳に『星の降る時』『マライア・マーティンの物語』『My Boy Jack』『アルビオン』『NINE』『チャイメリカ』、小田島恒志との翻訳作品に『コラボレーターズ』『ハリー・ポッターと呪いの子 舞台脚本 東京版』『サンシャイン・ボーイズ』『Oslo(オスロ)』『ビューティフル・ボーイ』『エミリーへの手紙』など多数。



五戸真理枝

GONOHE Marie

2005年、文学座付属演劇研究所に45期生として入所10年、座員に昇格。演出助手などとして座内の多数の公演に関わる。16年、文学座アトリエの会、久保田万太郎作『艶』で初演出。『もうひとりのわたしへ』『わたしの紅皿』『アラビアンナイト』『兵卒タナカ』『桜の園』『阿修羅のごとく』『三人姉妹』『年あらそい』などを演出。演出助手としては『岸 リトラル』『管理人』『坂の上の家』『娼年』『チック』『中橋公館』『食いしん坊万歳!正岡子規青春狂詩曲』などに参加。新国立劇場では『貴婦人の来訪』『どん底』の演出のほか、『オレスティア』『城塞』に演出助手として参加。演出のほか、戯曲や童話の執筆も手掛ける。23年、『貴婦人の来訪』(新国立劇場)、『コーヒーと恋愛』(アトリエの会)、『毛皮のヴィーナス』(世田谷パブリックシアター)での演出で、第30回読売演劇大賞最優秀演出家賞を受賞。



抱擁

2027年6月
〈新作〉New Play

The Grace of Our Being

小劇場

○会員先行販売期間：2027年3/27(土)～4/5(月) ○一般発売日：2027年4/11(日)

作・演出：山田佳奈

Written & Directed by YAMADA Kana

作品

現代的、国際的、批評的な作品づくりを目指す企画の日本人劇作家による新作書き下ろし。現代人を鋭い視線で描き出す山田佳奈が「生の選択、死の選択」という、昨今私たちが直面している問題に切り込みます。今、この日本で何がおきているのか。「生きづらい」という言葉が日常的に囁かれるようになったのは何故なのか。「生きる」ことを選択するように「死」を選択することは赦されることなのか……。死に直面した母と、生を宿した娘の対話を軸に、生と死、始まりと終わり、赦しと選択が交錯する現代日本の今が描かれていきます。

物語

埼玉県の小さなメキシカン食堂。店を畳む決意をした母・英子と娘・真莉は、閉店までの残りわずかな日々を過ごす。真莉は妊娠中だが、夫が行方不明になって一か月が経つ。一方、進行性の難病を患う英子は、スイスでの安楽死を密かに準備していた。食堂には、病院ボランティアの老人・橋本、外国人アルバイトのジャン、派手な中国人女性・典らが集い、それぞれ異なる文化や死生観が交錯していく。

そこに英子の旧友の娘・凪が訪ねてきて、母娘は「生きること」「死を選ぶこと」の意味を突きつけられ、互いの価値観は激しくぶつかり合う。

やがて英子の誕生日、食堂で開かれたささやかなパーティーの中で、真莉は初めての胎動を感じ、母は静かに旅立ちの時を迎える。

作・演出家からのメッセージ

山田佳奈

人間が本来持っている“選択する権利”とは何なのでしょうか。日本が超高齢社会となった一方で、医療技術は進化しました。活用するためのスキル習得や治療精度も向上し、人生の最期まで自分らしく生きるための手段が整えられつつあります。しかし生きることだけが幸せなのだろうかと、近年「尊厳死」や「安楽死」という考え方を主張する声も少なくありません。

私事ではありますが昨年息子を授かり、本人が人生の始まりを選べるものではないという当たり前のことに對峙したとき、改めて人間の尊厳を考えるようになりました。生きること、死ぬこと。あるいは家族、血、社会環境など、実は生まれる前からすでに決まっていることばかりです。それが運命ともいうのでしょうかが、だとしたらわたしたちは何のために生まれ、死んでいくのか。個人が自らの意思で生き方を選ぶとは何なのかと、根本的なこと今まで問い合わせざるを得ません。

今回芸術監督に就任された上村聰史さんからお声がけをいただき、新国立劇場では初めて演出を担うことになりました。まだまだ議論が必要なテーマを通して、大事なことと向き合っていけたらと思っています。

スタッフ プロフィール

山田佳奈

YAMADA Kana

脚本家・演出家・映画監督。レコード会社のプロモーターを経て、2010年に□字ックを旗揚げし、以降すべての脚本と演出を手掛ける。20年に監督・脚本を手掛けた『タイトル、拒絶』が東京国際映画祭日本映画スプラッシュ部門に選出、更に東京ジェムストーン賞を受賞。23年11月上演の劇団公演『剥愛』にて、第68回岸田國士戯曲賞 最終候補にノミネートされる。近年の主な作品に舞台『ナイフ』脚本・演出、Netflix『全裸監督』脚本、Amazon Original ドラマ「龍が如く～Beyond the Game～」脚本、小説『されど家族、あらがえど家族、だから家族は』執筆、マンガ『都合のいい果て』劇作など、活動は多岐にわたる。新国立劇場には23年6月公演『楽園』の脚本を書き下ろしている。



グリーン・リバイバル・ラボ #1

2027年7月

エンジェルス・イン・アメリカ

第一部「ミレニアム迫る」／第二部「ペレストロイカ」

Angels in America

Part1 Millennium Approaches / Part2 Perestroika

小劇場

○会員先行販売期間：2027年5/3(月・祝)～5/12(水) ○一般発売日：2027年5/23(日)

作：トニー・クシュナー

Written by Tony KUSHNER

翻訳：小田島創志

Translated by ODASHIMA Soshi

演出：上村聰史

Directed by KAMIMURA Satoshi

出演：浅野雅博、岩永達也、長村航希、

Cast : ASANO Masahiro, IWANAGA Tatsuya, OSAMURA Koki

坂本慶介、水 夏希、山西 悅 ほか

SAKAMOTO Keisuke, MIZU Natsuki, YAMANISHI Atsushi and more

作品

新芸術監督・上村聰史が掲げる支柱の一つである「消費で終わらないパフォーマンス」。その第一歩として、毎シーズン“共通の舞台美術”で上演し、社会の持続性に伴う資源の有効活用を目指すプロジェクト「グリーン・リバイバル・ラボ」が始動します。その第一弾として、2023年にフルオーディション企画として、上村自身が演出した、トニー・クシュナーの名作『エンジェルス・イン・アメリカ』二部作を再構築。本作は、1980年代半ばのエイズ禍のニューヨークを舞台に、セクシュアリティ、人種問題、信仰、政治など、アメリカ社会が抱える苦悩や葛藤を浮き彫りにした傑作群像劇です。エイズを発症したゲイの青年・プライアーを中心に、人々が懸命に前に進もうとする姿を、天使の登場などファンタジーの要素も織り交ぜながら描きます。

作品を深く掘り下げながら、声と身体、そして物語の可能性を核とする作品づくりに挑む本作。出演者には、本作において実在した人物、ロイ・コーンを演じ第74回芸術選奨、第31回読売演劇大賞最優秀男優賞を受賞した山西 悅をはじめ、浅野雅博、岩永達也、長村航希、坂本慶介、水 夏希の初演メンバーが再結集。

さらに2名の新キャストを迎えて、再び新国立劇場にて「大いなる創造」が幕をあけます。どうぞご期待ください。



2023年公演より (撮影: 宮川舞子)

物語

〈第一部〉

1985年ニューヨーク。青年ルイスは同棲中の恋人プライアーからエイズ感染を告白され、自身も感染することへの怯えからプライナーを一人残して逃げてしまう。モルモン教徒で裁判所書記官のジョーは、情緒不安定で薬物依存の妻ハーパーと暮らしている。彼は、師と仰ぐ大物弁護士のロイ・コーンから司法省への栄転を持ちかけられる。やがてハーパーは幻覚の中で夫がゲイであることを告げられ、ロイ・コーンは医者からエイズであると診断されてしまう。職場で出会ったルイスとジョーが交流を深めていく一方で、ルイスに捨てられたプライナーは天使から自分が預言者だと告げられ……。

〈第二部〉

ジョーの母ハンナは、幻覚症状の悪化が著しいハーパーをモルモン教ビジターセンターに招く。一方、入院を余儀なくされたロイ・コーンは、元ドラッグクイーンの看護師ベリーズと出会う。友人としてプライナーの世話をするベリーズは、「プライナーの助けが必要だ」という天使の訪れの顛末を聞かされる。そんな中、進展したかに思えたルイスとジョーの関係にも変化の兆しが見え始める。

翻訳家からのメッセージ

小田島創志

新国立劇場が『エンジェルス・イン・アメリカ』を上演した2023年から、多様性と平等は進むどころか、むしろバックラッシュが起きている気がしてならない。日本でも、同性婚を認めない現行の民法は「合憲」であると東京高裁は判断した。プライマーたちが抱いた「前進」「変化」の精神は、差別や偏見という社会の“疫病”と、今も戦い続けている。強者やマジョリティによる硬直した規範や価値観、異性愛中心主義にがんじがらめとなり、さらには弱肉強食の新自由主義が蔓延すると、いわゆる「ケアの倫理」が軽視されて、分断と孤立が進んでいく。エイズ禍が拡大していた1980年代半ばのニューヨークで、ゲイの男性やその周囲の人物が直面した根強い差別や偏見は、26年の日本にも暗い影を落としている。自己と他者の違いを認識しながら共生していくにはどうすればよいか。私たちの「今」を照射するこの作品が再演される意義は、今さらに大きくなっている。

数年前はトニー・クシュナーの言葉一つひとつを、祈るような気持ちを込めて翻訳した。豊かな言語表現から、登場人物の喜怒哀楽が横溢している。その強度に寄り添い、また作品と全力で向き合う日々になりそうだ。

演出家からのメッセージ

上村聰史

「大いなる創造、再び」

二十世紀最高峰の戯曲と評される本作。疾走感あふれる物語展開、多彩なエピソード、一筋縄でいかない登場人物たちと演戯の魅力が余すことなく詰まった、まるで宝箱のような長編戯曲ですが、何よりも、“今あるこの世界が、先人たちの苦しみの上に成り立っている”という、歴史への絶大な敬意がこの作品の根底に流れています。この作者トニー・クシュナーの創作の信念こそが、本作が演劇史に語り継がれる名作と評される所以かと、そう深く実感しました。

今回は装い新たに、よりそぎ落とされた表現でお届けする上演になります。それは本作の上演が、演劇が社会生活と共にあるためにも、素材や資源を未来のために大切に扱っていこうという企画の皮切りということもありますが、様々な情報が著しいスピードで消費されていく昨今、今一度、演劇の醍醐味ともいえる、俳優の身体から紡がれる物語、俳優が発する台詞から広がる想像力の広がりを再発見する企画でもあります。そして、他者から発せられる物語こそが、己の一生の財産となり、結果、それが世界全体の財産になるという、壮大な理想を掲げ、今まで、“大いなる創造”に取り組みたいと思います。

エンジェルス・イン・アメリカ

スタッフ プロフィール

トニー・クシュナー

Tony KUSHNER

1956年、アメリカ・ニューヨークのユダヤ人家系に生まれ、コロンビア大学とニューヨーク大学で学ぶ。代表作『エンジェルス・イン・アメリカ』は第一部が90年に、第二部が91年に発表され、第一部はピュリツツァー賞及びトニー賞作品賞を、第二部はトニー賞を受賞。脚本を担当した2003年放送のテレビ版はエミー賞とゴールデングローブ賞を受賞した。これらの受賞歴に加え、これまでにピュリツツァー賞、オビー賞、イブニングスタンダード演劇賞、オリヴィエ賞等を受賞し、12年に国民芸術勲章を授与されている。これまでの主な作品に『A Bright Room Called Day』『Slavs!』『Hydrotophia』『ホームバディ／カブル』、翻訳・翻案を行った『舞台は夢』(原作:ピエール・コルネイユ)、『ディブック』(原作:シュロイメ・アンスキー)、『セツアンの善人』『肝っ玉おっ母とその子どもたち』(原作:ベルトルト・ブレヒト)、ミュージカル『キャロライン、オア・チェンジ』やオペラ『A Blizzard on Marblehead Neck』(共に作曲家ジニー・テソーリとの共作)など。映画脚本に、スティーヴン・スピルバーグ監督作『フェイブルマンズ』『ウエスト・サイド・ストーリー』『リンカーン』『ミュンヘン』などがある。

小田島創志

ODASHIMA Soshi

※7ページを参照



上村聰史

KAMIMURA Satoshi

※3ページを参照



Drama

プロジェクト

集団創作による新作

劇作コンペ・出演者フルオーディション

グリーン・リバイバル・ラボ

ドラマクエスト—物語の探求—

集団創作による新作

劇作コンペ・出演者フルオーディション

Devised Play Development Initiative

概要

上村聰史監督の指針のひとつである、「新しい才能との出会い」。この意に沿い、劇作家を公募し、トライアルを重ねながら、新作を創作していくプロジェクトを立ち上げます。

これまで、新国立劇場での日本人劇作家による新作は芸術監督からの委嘱が主流でした。一方で、日本演劇の歴史のなかで多くの新作が、劇団による集団創作から生まれてきました。このノウハウに注目し、時間をかけて劇作家と演出家と俳優のアイデアを積極的に交流し、新作の可能性を発見していくプロジェクトを始動します。具体的には、劇作家を公募し、演出家と方向性の検討を重ね、選ばれた作品の出演者はフルオーディション形式で決定し、プロダクションワークショップを経て、上演に向かいます。

実際の上演は2028年4月頃を予定しており、26年春にプロジェクトの詳細を発表し、劇作家の募集を開始いたします。そして26年秋に出演者のフルオーディションの応募受付を開始する予定です。

本プロジェクトで演出を担うのは、五戸真理枝。公募で決定した劇作家、キャストが五戸と共に、27年春頃より長い時間をかけて新作を創り上げます。どうぞご期待ください。

グリーン・リバイバル・ラボ

Green Revival Lab

概要

今を生きる私たちが、変化し続ける地球環境に対して何ができるのか。そして、未来の社会のために舞台芸術が現実的に貢献できることとは何か。その答えのひとつとして、私たちは「資源を大切に使い続けること」を掲げ、一度きりの消費で終わらないパフォーマンスを目指します。

演劇は、同じ戯曲であっても、出演者や演出、そして観客の感性が混ざり合うことで、常に新しく生まれ変わり続けます。近年では多彩な電球による照明機材、イメージを迅速に立体化できる映像投影、デジタル化が躍進する音響効果、高い精度を誇る生地へのプリント技術など、舞台技術の進歩はめざましく、表現の幅は格段に広がりました。これまでどうしても多くのコストや廃棄物を伴ってきた部分の大きい「舞台美術」のセクションに、こうした技術との親和性を活かすことで、舞台芸術の考え方をアップデートできればと思います。

この試みのひとつとして、上村芸術監督の任期4年にわたり、毎シーズン“共通の舞台美術”を使って異なる演目を上演するプロジェクト「グリーン・リバイバル・ラボ」を始動します。

その第一弾として、2023年に上村監督自身が演出した『エンジェルス・イン・アメリカ』を2026/2027シーズンで上演いたします。今回は、過去に新国立劇場で上演された『レオポルト・シュタット』『白衛軍 The White Guard』、そして26年11月に上演する『巨匠とマルガリータ』の舞台美術を一部再利用。さらに今後は、この『エンジェルス・イン・アメリカ』の舞台セットをそのまま活用し、上演が難しいとされる長編戯曲や、共通のテーマを持つ名作の同時上演（ダブルビル）などにも挑戦していく予定です。

また、本プロジェクト以外でも、27年4月の『見えざる手』において、25年12月に上演した『スリー・キングダムス Three Kingdoms』の素材を再利用するなど、劇場全体で持続可能な舞台作りを推進してまいります。

ドラマクエスト—物語の探求—

Drama Quest

概要

現代の演劇は、多様な価値観を形にしながら進化を続けてきました。21世紀も四半世紀が過ぎ、文明が驚異的なスピードで進歩する一方で、格差や分断といった課題も深まっています。こうした混迷する世界を映し出す鏡のように、演劇の世界でも今、これまでにない新しい表現が次々と生まれています。

このプロジェクトでは、言語という土地とともに育まれたツールを核としながらも、世界へと視界を広げていく現代演劇の「これから」を考察し、共有していきたいと思っています。

プロジェクト名は「ドラマクエスト—物語の探求—」。世界各地で話題となっている演劇ムーブメントや、日本で生まれる新しい劇言語と、国内外問わず新しい形式の演劇を皆さんと共有し、考察していきます。

「今、世界各地の演劇の現場で何が起きているのか？」を体感していただくために、次のような多彩なプログラムを実施していく予定です。

- ・劇作家、演出家、俳優、そして様々な分野のクリエーターを迎えたトークイベント
- ・最新戯曲やトライアウトによる試作戯曲のリーディングイベント
- ・演技やスタッフワークの体験型ワークショップやレクチャー

これらを通して、「現在形の演劇」を皆さんにお届けしていきます。

Drama

公演一覧

開場記念公演～2025/2026シーズン

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
開場記念公演	★紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子	1997.10/22
	[蒲田行進曲完結編] 銀ちゃんが逝く	つかこうへい		つかこうへい	1997.11/13
	夜明け前	原作 島崎藤村	脚色 村山知義 補訂脚本 津上忠	木村光一	1997.12/04
	リア王	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	鶴山 仁	1998.01/17
1998/ 1999	★虹を渡る女	岩松 了		岩松 了	1998.05/07
	幽霊はここにいる	安部公房		串田和美	1998.05/12
	★今宵かぎりは… 1928超巴里井主義宣言の夜	竹内銃一郎		栗山民也	1998.06/12
	★音楽劇 ブッダ	原作 手塚治虫	脚本 佐藤 信	栗山民也	1998.09/07
	THE PIT フェスティバル				
	カストリ・エレジー スタインベック「二十日鼠と人間」より	脚本 鐘下辰男		鐘下辰男	1998.10/03
	神々の国の首都	坂手洋二		坂手洋二	1998.10/17
	寿歌	北村 想		北村 想	1998.10/29
	ディア・ライア すてきな嘘つき	ジェローム・キルティ	丹野郁弓	宮田慶子	1998.11/04
	野望と夏草	山崎正和		西川信廣	1998.12/02
	★新・雨月物語		脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	1999.01/11
	子午線の祀り	木下順二	演出 観世栄夫／内山 鶴／酒井 誠／高瀬精一郎		1999.02/03
	セツアンの善人	ベルトルト・ブレヒト	松岡和子	串田和美	1999.05/18
	羅生門	原作 芥川龍之介		構成・演出 渡辺和子	1999.06/04
	棋人—チーレン—	過 士行	菱沼彬晃	林 兆華	1999.07/01
1999/ 2000	キーン 或いは狂気と天才	J.P. サルトル 上演台本 栗山民也／江守 徹	鈴木力衛	栗山民也	1999.10/04
	美しきものの伝説		宮本 研	木村光一	1999.11/04
	—森本薰の世界—				
	かくて新年は	森本 薫		宮田慶子	1999.12/08
	怒濤	森本 薫		マキノノゾミ	2000.01/11
	華々しき一族	森本 薫		鐘下辰男	2000.02/09
	★新・地獄変	原作 芥川龍之介	脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	2000.03/23
	なよたけ	加藤道夫		木村光一	2000.04/11
2000/ 2001	夜への長い旅路	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	2000.05/11
	マクベス	ウィリアム・シェイクスピア	福田恒存翻訳より 潤色 鐘下辰男	鐘下辰男	2000.09/08
	プロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2000.10/02
	欲望という名の電車	テネシー・ウィリアムズ	鳴海四郎	栗山民也	2000.10/20
	シリーズ「時代と記憶」				
	★memorandum メモランダム	構想・構成 ダムタイプ			2000.11/27
	★母たちの国へ	松田正隆		西川信廣	2001.01/10
	★ピカドン・キジムナー	坂手洋二		栗山民也	2001.02/10
	★こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	2001.03/12
	★夢の裂け目	井上ひさし		栗山民也	2001.05/08
	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子／井上ひさし	2001.04/04
	賛作・桜の森の満開の下	野田秀樹		野田秀樹	2001.06/01

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2001/ 2002	海外招待作品 Vol.1 太陽劇団 堤防の上の鼓手	エレーヌ・シクスー	字幕翻訳 松本伊織子	アリアーヌ・ムヌーシュキン	2001.09/07
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鵜山仁	2001.10/29
	★美女で野獣	荻野アンナ		宮田慶子	2001.12/10
	シリーズ チェーホフ・魂の仕事				
	Vol.1 かもめ	アントン・チェーホフ	英訳 マイケル・フレイン 翻訳 小田島雄志	マキノゾミ	2002.01/11
	Vol.2 くしゃみ／the Sneeze	アントン・チェーホフ	台本 マイケル・フレイン 翻訳 小田島恒志	熊倉一雄	2002.02/28
	Vol.3 ★「三人姉妹」を追放されし トゥーゼンバフの物語	岩松 了		岩松 了	2002.04/01
	Vol.4 ワーニャおじさん 四幕の田園生活劇	アントン・チェーホフ	小野理子	栗山民也	2002.05/09
	Vol.5 櫻の園	アントン・チェーホフ	潤色 堀越 真 (神西清翻訳による)	栗山民也	2002.06/21
	★その河をこえて、五月	平田オリザ／金 明和		李炳煥／平田オリザ	2002.06/03
2002/ 2003	海外招待作品 Vol.2 国際チエーホフ演劇祭 in モスクワ ハムレット	ウィリアム・シェイクスピア		ペーター・シュタイン	2002.09/07
	プロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2002.10/11
	★アヤジルシ—誘われて	太田省吾		太田省吾	2002.11/12
	シリーズ「現在へ、日本の劇」				
	①ビルグリム	鴻上尚史		鴻上尚史	2003.01/14
	②浮標	三好十郎		栗山民也	2003.02/19
	③マッチ売りの少女	別役 実		坂手洋二	2003.04/08
	④サド侯爵夫人	三島由紀夫		鐘下辰男	2003.05/26
	★涙の谷、銀河の丘	松田正隆		栗山民也	2003.05/13
	★ゴロヴリョフ家の人々	原作 サルティコフ・シchedrin	翻訳 湯浅芳子 脚本 永井 愛	永井 愛	2003.06/18
2003/ 2004	★nocturne 一月下的歩行者	構成 松本雄吉		松本雄吉	2003.09/08
	★夢の泪	井上ひさし		栗山民也	2003.10/09
	世阿彌	山崎正和		栗山民也	2003.11/27
	シリーズ「女と男の風景」				
	①海外招待作品 Vol.3 香港・劇場組合 The Game／ザ・ゲーム	ウジェーヌ・イヨネスコの 悲喜劇『椅子』より 翻案 ジム・チム／オリヴィア・ヤン	字幕 角田美知代	ジム・チム／ オリヴィア・ヤン	2004.02/20
	②★THE OTHER SIDE／線のむこう側	アリエル・ドーフマン	水谷八也	孫 樞策	2004.04/12
	③★てのひらのこびと		鈴江俊郎	松本祐子	2004.05/11
	④請願—静かな叫び—	ブライアン・クラーク	吉原豊司	木村光一	2004.06/22
	こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	2004.03/10
	透明人間の蒸氣	野田秀樹		野田秀樹	2004.03/17
	プロードウェイ・ミュージカル INTO THE WOODS	作詞・作曲 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2004.06/09

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2004/ 2005	THE LOFT 小空間からの提案				
	胎内	三好十郎		栗山民也	2004.10/04
	◎ ★ヒトノカケラ	篠原久美子		宮崎真子	2004.10/22
	★二人の女兵士の物語	坂手洋二		坂手洋二	2004.11/08
	喪服の似合うエレクトラ	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	2004.11/16
	★城	原作 フランツ・カ夫カ	構成 松本 修	松本 修	2005.01/14
	シリーズ 笑い				
	①花咲く港	菊田一夫		鶴山 仁	2005.03/14
	②★コミュニケーションズ 現代劇作家によるコント集	作 綾田俊樹／いとうせいこう／ケラリーノ・サンドロヴィッチ／杉浦久幸 高橋徹郎／竹内 佑／鄭 義信／土田英生／別役 実／ふじきみつ彦／武藤真弓 原作使用 筒井康隆 構成・演出 渡辺えり子			2005.04/08
	③★箱根強羅ホテル	井上ひさし		栗山民也	2005.05/19
	④うら騒ぎ ノイゼズ・オフ	マイケル・フレイン	小田島恒志	白井 晃	2005.06/27
	その河をこえて、五月	平田オリザ／金 明和		李 炳煥／平田オリザ	2005.05/13
	海外招待作品 Vol.4 ベルリナー・アンサンブル アルトウロ・ワイの興隆	ベルトルト・ブレヒト	イヤホンガイド翻訳 新野守広	ハイナー・ミュラー	2005.06/22
2005/ 2006	◎黒いチューリップ／盲導犬	唐 十郎		中野敦之	2005.09/27
	◎屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	2005.10/31
	母・肝っ玉とその子供たち —三十年戦争年代記	ベルトルト・ブレヒト	谷川道子	栗山民也	2005.11/28
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	小田島雄志	イリーナ・ブルック	2006.02/09
	十二夜	ウィリアム・シェイクスピア	脚本 山崎清介 小田島雄志翻訳による	山崎清介	2006.03/07
	シリーズ「われわれは、どこへいくのか」				
	①★カエル	過 士行	菱沼彬晃	鶴山 仁	2006.04/01
	◎ ②★マテリアル・ママ		岩松 了	岩松 了	2006.04/19
	③★やわらかい服を着て	永井 愛		永井 愛	2006.05/22
	④★夢の痴 (かさぶた)	井上ひさし		栗山民也	2006.06/28
	プロードウェイ・ミュージカル Into the Woods	作詞・作曲 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラバイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2006.05/19
	★アジアの女	長塚圭史		長塚圭史	2006.09/28
	「劇的な情念をめぐって」—世界の名作より—				
2006/ 2007	シラノ・ド・ベルジュラック	原作 エドモン・ロスタン	翻訳 辰野 隆／鈴木信太郎	構成・演出 鈴木忠志	2006.11/02
	イワーノフ／オイディップス王	原作 アントン・チェーホフ 原作 ソフォクレス	翻訳 池田健太郎 日本語 福田恒存 ドイツ語 ヘルダーリン	構成・演出 鈴木忠志	2006.11/04
	◎ ★エンジョイ	岡田利規		岡田利規	2006.12/07
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	2007.03/01
	★CLEANSKINS／きれいな肌	シャン・カーン	小田島恒志	栗山民也	2007.04/18
	★下周村—花に嵐のたとえもあるさ—	平田オリザ／李 六乙		李 六乙／平田オリザ	2007.05/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	ジョン・ケアード	2007.05/31
	氷屋来たる	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	2007.06/18

★=新作 ◎=THE LOFT 公演

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2007/ 2008	「三つの悲劇」—ギリシャから				
	Vol.1 ★アルゴス坂の白い家 —クリュタイメストラ—	川村 毅		鶴山 仁	2007.09/20
	Vol.2 ★たとえば野に咲く花のよう —アンドロマケ—	鄭 義信		鈴木裕美	2007.10/17
	Vol.3 ★異人の唄 —アンティゴネ—	土田世紀	脚色 鐘下辰男	鐘下辰男	2007.11/14
	屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	2008.02/26
	★焼肉ドラゴン	鄭 義信	翻訳 川原賢柱	梁 正雄／鄭 義信	2008.04/17
	オットーと呼ばれる日本人	木下順二		鶴山 仁	2008.05/27
	シリーズ・同時代				
	Vol.1 ★鳥瞰図—ちょうかんず—	早船 聰		松本祐子	2008.06/11
	Vol.2 ★混じりあうこと、消えること	前田司郎		白井 晃	2008.06/27
	Vol.3 ★まほろば	蓬萊竜太		栗山民也	2008.07/14
2008/ 2009	近代能楽集『綾の鼓』『弱法師』	三島由紀夫		前田司郎〈綾の鼓〉 深津篤史〈弱法師〉	2008.09/25
	山の巨人たち	ルイジ・ピランデルロ	翻訳 田之倉稔	ジョルジュ・ラヴォーダン	2008.10/23
	舞台は夢—イリュージョン・コミック—	ピエール・コルネイユ	翻訳 伊藤 洋	鶴山 仁	2008.12/03
	シリーズ・同時代【海外編】				
	Vol.1 昔の女	ローラント・シンメルブフェニヒ	翻訳 大塚 直	倉持 裕	2009.03/12
	Vol.2 シュート・ザ・クロウ	オーウェン・マカファーティー	翻訳 浦辺千鶴／小田島恒志	田村孝裕	2009.04/10
	Vol.3 タトゥー	デア・ローアー	翻訳 三輪玲子	岡田利規	2009.05/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	ジョン・ケアード	2009.05/29
	★現代能楽集 鶴	坂手洋二		鶴山 仁	2009.07/02
	象	別役 実		深津篤史	2010.03/05
2009/ 2010	象	別役 実		深津篤史	2010.03/05
	東京裁判三部作	井上ひさし		栗山民也	
	夢の裂け目				2010.04/04
	夢の泪				2010.05/06
	夢の痴(かさぶた)				2010.06/03
	★エネミイ	蓬萊竜太		鈴木裕美	2010.07/01
	[JAPAN MEETS…—現代劇の系譜をひもとく—]				
	I ヘッダ・ガーブレル	ヘンリック・イプセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス／ 長島 碩	宮田慶子	2010.09/17
	II やけたトタン屋根の上の猫	テネシー・ウィリアムズ	翻訳 常田景子	松本祐子	2010.11/09
	III わが町	ゾーン・ワイルダー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	2011.01/13
2010/ 2011	IV ゴードーを待ちながら	サミュエル・ベケット	翻訳 岩切正一郎	森 新太郎	2011.04/15
	焼肉ドラゴン	鄭 義信	翻訳 川原賢柱	鄭 義信	2011.02/07
	鳥瞰図—ちょうかんず—	早船 聰		松本祐子	2011.05/10
	雨	井上ひさし		栗山民也	2011.06/09
	★おどくみ	青木 豪		宮田慶子	2011.06/27

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2011/ 2012	【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識—				
	I 朱雀家の滅亡	三島由紀夫		宮田慶子	2011.09/20
	II ★イロアセル	倉持 裕		鵜山 仁	2011.10/18
	III 天守物語	泉 鏡花		白井 晃	2011.11/05
	★パーマ屋スマレ	鄭 義信		鄭 義信	2012.03/05
	まほろば	蓬萊竜太		栗山民也	2012.04/02
	負傷者16人—SIXTEEN WOUNDED—	エリアム・クライエム	翻訳 常田景子	宮田慶子	2012.04/23
	[JAPAN MEETS…—現代劇の系譜をひもとく—]				
2012/ 2013	V サロメ	オスカー・ワイルド	翻訳 平野啓一郎	宮本亜門	2012.05/31
	VI 温室	ハロルド・ビンター	翻訳 喜志哲雄	深津篤史	2012.06/26
	リチャード三世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鵜山 仁	2012.10/03
	[JAPAN MEETS…—現代劇の系譜をひもとく—]				
	VII るつぼ	アーサー・ミラー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	2012.10/29
	★音のいない世界で	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2012.12/23
	長い墓標の列	福田善之		宮田慶子	2013.03/07
	With—つながる演劇—				
2013/ 2014	★ウェールズ編『効率学のススメ』	アラン・ハリス	翻訳 長島 確	ジョン・E・マグラー	2013.04/09
	★韓国編 アジア温泉	鄭 義信	翻訳 朴 賢淑	孫 梓策	2013.05/10
	★ドイツ編 つく、きえる	ローラント・シンメルプフェニヒ	翻訳 大塚 直	宮田慶子	2013.06/04
	象	別役 実		深津篤史	2013.07/02
	Try・Angle—三人の演出家の視点—				
	Vol.1 OPUS／作品	マイケル・ホリンガー	翻訳 平川大作	小川絵梨子	2013.09/10
	Vol.2 エドワード二世	クリストファー・マーロウ	翻訳 河合祥一郎	森 新太郎	2013.10/08
	Vol.3 アルトナの幽閉者	ジャン=ポール・サルトル	翻訳 岩切正一郎	上村聰史	2014.02/19
2014/ 2015	[JAPAN MEETS…—現代劇の系譜をひもとく—]				
	VIII ピグマリオン	ジョージ・バーナード・ショー	翻訳 小田島恒志	宮田慶子	2013.11/13
	マニラ瑞穂記	秋元松代		栗山民也	2014.04/03
	テンペスト	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	白井 晃	2014.05/15
	★十九歳のジェイコブ	原作 中上健次	脚本 松井 周	松本雄吉	2014.06/11
	永遠の一瞬—Time Stands Still—	ドナルド・マーグリーズ	翻訳 常田景子	宮田慶子	2014.07/08
	[JAPAN MEETS…—現代劇の系譜をひもとく—]				
	IX 三文オペラ	ベルトルト・ブレヒト	翻訳 谷川道子	宮田慶子	2014.09/10
2014/ 2015	二人芝居—対話する力—				
	Vol.1 ブレス・オブ・ライフ～女の肖像～	デイヴィッド・ヘア	翻訳 鴎澤麻由子	蓬萊竜太	2014.10/08
	Vol.2 ご臨終	モーリス・パニッチ	翻訳 吉原豊司	ノゾエ征爾	2014.11/05
	Vol.3 星ノ数ホド	ニック・ペイン	翻訳 浦辺千鶴	小川絵梨子	2014.12/03
	ワインズロウ・ボーイ	テレンス・ラティガン	翻訳 小川絵梨子	鈴木裕美	2015.04/09
	[JAPAN MEETS…—現代劇の系譜をひもとく—]				
	X 海の夫人	ヘンリック・イプセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス／長島 確	宮田慶子	2015.05/13
	東海道四谷怪談	鶴屋南北	上演台本 フジノサツコ	森 新太郎	2015.06/10
	★かがみのかなたはたなかのなかに	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2015.07/06

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2015/ 2016	パッション	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェームス・ラバイン	翻訳 浦辺千鶴 訳詞 竜 真知子	宮田慶子	2015.10/16
	桜の園	アントン・チェーホフ	翻訳 神西 清	鵜山 仁	2015.11/11
	バグダッド動物園のベンガルタイガー	ラジヴ・ジョセフ	翻訳 平川大作	中津留章仁	2015.12/08
	鄭義信 三部作				
	焼肉ドラゴン	鄭義信	翻訳 川原賢柱	鄭義信	2016.03/07
	たとえば野に咲く花のよう	鄭義信		鈴木裕美	2016.04/06
	パーマ屋スマレ	鄭義信		鄭義信	2016.05/17
	あわれ彼女は娼婦	ジョン・フォード	翻訳 小田島雄志	栗山民也	2016.06/08
	★「かぐや姫伝説」より月・こうこう,風・そうそう	別役 実		宮田慶子	2016.07/13
2016/ 2017	フリック	アニー・ベイカー	翻訳 平川大作	マキノノゾミ	2016.10/13
	ヘンリー四世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鵜山 仁	
	第一部 —混沌—				2016.11/26
	第二部 —戴冠—				2016.11/27
	かさなる視点 —日本戯曲の力—				
	Vol.1 白蟻の巣	三島由紀夫		谷 賢一	2017.03/02
	Vol.2 城塞	安部公房		上村聰史	2017.04/13
	Vol.3 マリアの首 —幻に長崎を想う曲—	田中千禾夫		小川絵梨子	2017.05/10
	[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]				
	☒ 君が人生の時	ウィリアム・サローヤン	翻訳 浦辺千鶴	宮田慶子	2017.06/13
	☒ 怒りをこめてふり返れ	ジョン・オズボーン	翻訳 水谷八也	千葉哲也	2017.07/12
2017/ 2018	トロイ戦争は起こらない	ジャン・ジロドウ	翻訳 岩切正一郎	栗山民也	2017.10/05
	プライムたちの夜	ジョーダン・ハリソン	翻訳 常田景子	宮田慶子	2017.11/07
	かがみのかなたはたなかのなかに	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2017.12/05
	赤道の下のマクベス	鄭義信		鄭義信	2018.03/06
	1984	原作 ジョージ・オーウエル 翻訳 平川大作	脚本 ロバート・アイク／ ダンカン・マクミラン	小川絵梨子	2018.04/12
	ヘンリー五世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鵜山 仁	2018.05/17
	夢の裂け目	井上ひさし		栗山民也	2018.06/04
	★消えていくなら朝	蓬萊竜太		宮田慶子	2018.07/12
	誤解	アルベール・カミュ	翻訳 岩切正一郎	稻葉賀恵	2018.10/04
2018/ 2019	誰もいない国	ハロルド・ピントー	翻訳 喜志哲雄	寺十 吾	2018.11/08
	スカイライト	デイヴィッド・ヘア	翻訳 浦辺千鶴	小川絵梨子	2018.12/06
	フルオーディション1 かもめ	作 アントン・チェーホフ 台本 トム・ストッパード	翻訳 小川絵梨子	鈴木裕美	2019.04/11
	★少年王者館 1001	天野天街		天野天街	2019.05/14
	オレスティア	原作 アイスキュロス 作 ロバート・アイク	翻訳 平川大作	上村聰史	2019.06/06
	★骨と十字架	野木萌葱		小川絵梨子	2019.07/11
	ごつごつプロジェクト —ディベロップメント— リーディング公演				
	リチャード三世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	西 悟志	2019.03/13
	あーぶくたった、にいたった	別役 実		西沢栄治	2019.03/14
	スペインの戯曲	ヤスミナ・レザ	翻訳 穴澤万里子	大澤 遊	2019.03/15

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2019/ 2020	ことぜんシリーズ				
	Vol.1 どん底	マクシム・ゴーリキー	翻訳 安達紀子	五戸真理枝	2019.10/03
	Vol.2 あの出来事	デイヴィッド・グレッグ	翻訳 谷岡健彦	瀬戸山美咲	2019.11/13
	Vol.3 タージマハルの衛兵	ラジヴ・ジョセフ	翻訳 小田島創志	小川絵梨子	2019.12/07
	フルオーディション2 反応工程 (公演中止)	宮本 研		千葉哲也	
	ガールズ&ボーイズ (公演中止)	デニス・ケリー	翻訳 小田島創志	蓬萊竜太	
	願いがかなうぐつぐつかクテル	ミヒャエル・エンデ	翻訳 高橋文子	小山ゆうな	2020.07/09
	★イヌビト～犬人～	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2020.08/05
	ガラスの動物園 (公演中止)	テネシー・ウィリアムズ		イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	
2020/ 2021	リチャード二世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2020.10/02
	ピーター&ザ・スター・キャッチャー	作 リック・エリス 原作 デイヴ・パリー／ リドリー・ピアソン	翻訳 小宮山智津子	ノゾエ征爾	2020.12/10
	人を思うから				
	フルオーディション3 其の壱 斬られの仙太	三好十郎		上村聰史	2021.4/06
	其の弐★ 東京ゴッドファーザーズ	原作 今 敏 上演台本 土屋理敬		藤田俊太郎	2021.05/12
	其の参 キネマの天地	井上ひさし		小川絵梨子	2021.06/10
	フルオーディション2 反応工程	宮本 研		千葉哲也	2021.07/12
	ガラスの動物園 (公演中止)	テネシー・ウィリアムズ		イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	
	フルオーディション4 イロアセル	倉持 裕		倉持 裕	
2021/ 2022	あー ぶくたつた、にいたつた	別役 実		西沢栄治	2021.12/07
	声 議論、正論、極論、批判、対話…の物語				
	Vol.1 アンチポデス	アニー・ベイカー	翻訳 小田島創志	小川絵梨子	2022.04/14
	Vol.2 ロビー・ヒーロー	ケネス・ロナーガン	翻訳 浦辺千鶴	桑原裕子	2022.05/06
	Vol.3 貴婦人の来訪	フリードリヒ・デュレンマット	翻訳 小山ゆうな	五戸真理枝	2022.06/01
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	字幕翻訳 石切正一郎	イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	2022.09/28
	レオポルトシュタット	トム・ストップパード	翻訳 広田敦郎	小川絵梨子	2022.10/14
	未来につなぐもの				
	I ★私の一ヶ月	須貝 英		稻葉賀恵	2022.11/02
2022/ 2023	II ★夜明けの寄り鯨	横山拓也		大澤 遊	2022.12/01
	III ★楽園	山田佳奈		眞鍋卓嗣	2023.06/08
	フルオーディション5 エンジェルス・イン・アメリカ	トニー・クシュナー	翻訳 小田島創志	上村聰史	2023.04/18
	★モグラが三千あつまって	原作 武井 博 上演台本 長塚圭史	振付 近藤良平 音楽 阿部海太郎	長塚圭史	2023.07/14

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2023/ 2024	シェイクスピア、ダークコメディ交互上演				
	尺には尺を	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2023.10/18
	終わりよければすべてよし	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2023.10/19
	フルオーディション6 東京ローズ	台本・作詞 メリヒー・ユーン/ カラ・ポルドウイン 作曲 ウィリアム・パトリック・ハリソン	翻訳 小川絵梨子 訳詞 土器屋利行 音楽監督 深沢桂子／村井一帆	藤田俊太郎	2023.12/07
	★デカローグ 1～4	原作 クシシュトフ・キエシロフスキ／クシシュトフ・ピエシェヴィチ	翻訳 久山宏一	小川絵梨子／上村聰史	2024.04/13
	★デカローグ 5・6	上演台本 須貝 英			2024.05/18
	★デカローグ 7～10				2024.06/22
	ピローマン	マーティン・マクドナー	翻訳 小川絵梨子	小川絵梨子	2024.10/08
2024/ 2025	★テーバイ	原作 ソボクレス 構成・上演台本 船岩祐太		船岩祐太	2024.11/07
	白衛軍 The White Guard	ミハイル・ブルガーコフ	翻訳 小田島創志	上村聰史	2024.12/03
	こつこつプロジェクト Studio公演				
	夜の道づれ	三好十郎		柳沼昭徳	2025.04/15
	シリーズ「光景—ここから先へと—」				
	vol.1 母	カレル・チャベック	日本語字幕翻訳 広田敦郎	シュチャバーン・パーツル	2025.05/28
	vol.2 ザ・ヒューマンズ 一人間たち	スティーヴン・キャラム	翻訳 広田敦郎	桑原裕子	2025.06/12
	フルオーディション7 vol.3 消えていくなら朝	蓬萊竜太		蓬萊竜太	2025.07/10
2025/ 2026	焼肉ドラゴン	鄭 義信	翻訳 川原賢柱	鄭 義信	2025.10/07
	焼肉ドラゴン 凱旋公演				2025.12/19
	鼻血—The Nosebleed—	アヤ・オガワ	字幕翻訳 広田敦郎	アヤ・オガワ	2025.11/20
	スリー・キングダムス Three Kingdoms	サイモン・スティーヴンス	翻訳 小田島創志	上村聰史	2025.12/02
	いま、ここに—				
	① ガールズ&ボーイズ	デニス・ケリー	翻訳 小田島創志	稻葉賀恵	2026.04/09
	フルオーディション8 ② エンドゲーム	サミュエル・ベケット	翻訳 岡室美奈子	小川絵梨子	2026.05/20
	③ ★りんごが落ちる 11の物語—短編・中編(仮)	ノゾエ征爾		金澤菜乃英	2026.06/13
					2026.07

★=新作

Memo
